た。而して幕末の石高は三千萬石を優に突破してゐたのであるから、此の點からみても總人口が三千萬人或は三千二百萬人位に達したと見るのは不當ではない。否斯く見てこそ、始めて德川時代の全國人口と明治の全國人口とが、合理的に連結するのである。

(1) 小宮山氏は天保五年の調査數に、明治初年調査の琉球、蝦夷の二國及華・士・卒族・エタ・非人の五類の數二百六十二萬人を加へたる、合計二千九百六十八萬餘人を以て當年の全國人口となしてゐる。但此の場合無籍者は不明としてやはり除外されてゐる。(前掲「國史論纂」一八一六頁)

(2) ドロッパース氏は色々の推算と推量とを以て、三百七十二萬人を加ふるを以て正當に近いものとしてゐるが、其根據とする所は全く取るに足らない(高橋氏譯、前掲書一四八頁)。

(3) 本庄榮治郎氏「日本人口史」四二頁

(4) 拙著「日本人口史」六三頁

(5) 內閣統計局調査資料第三輯「明治五年以降の我國人口」

全國人口の推計

(埋め草)

世上には往々上古、中古、中世の全國人口として傳へる數字がないではない。例へば聖德太子の御傳記と稱するもの、行基菩薩に關する書、或は日蓮の遺文錄と稱するもの等に記載する或は記載すると稱する計數が之であつて、德川期乃至明治初期の學者中之を引用する者が少なくない。

其の數は諸書大同小異であるが、聖德太子に關するものは四百九十何萬(崇峻、推古兩天皇の御代)とするものが多く、行基菩薩に關するものは或は四百五十何萬とし、或は八百六十何萬(聖武天皇の御代)とし、又日蓮に關するものは略〻聖德太子に關するものと等しい(後宇多天皇の御代)。此等の計數は上古から中世に及ぶ殆んど一千年に亙る時代に關するものであるが、其の數に大差がないのは怪しむべく、而も男女別人口の判明するものは悉く女子人口が超過し、或ひは二倍、或ひは三倍に上る有樣である。

此等は要するに單なる傳說に過ぎず、而も之を載する原典自體が遙か後世の僞撰なるもの多く、其の計數が信憑に値ひしないのは云ふ迄もないのである。

以上のやうな事情であるから、今日吾々は中世以前の全國人口や、人口狀態を適確に窺ひ知ることは殆ど不可能である。明治初年以降學者の中には、此の不可能事と見らるゝ全國人口の推計を種々の點から試みた人もあつたが、其の根據とする所は充分有力とは云ひ難く、又推計の方法も甚だ素朴であつたゝめ、得た結果も餘り價値高いものと認め難いのは甚だ遺憾である。

唯、深田吾一氏が先年其の著「奈良朝時代民政經濟の數的研究」に於て、僅かに殘れる戶籍、計帳及輸租帳の斷簡を基礎として、人口の男女別比率、年齡構成、男口と課口との比率、一戶當人員等を算出し、之より發して當時の鄕別及國別人口を推計してゐられるのは、從前諸學者の試みに比して、頗る出色の業績と云ふべきであらう。

同氏の推計に依れば、奈良時代の「良民總口は五百萬と六百萬との間にあり」之に良民以外の賤民・雜戶・私民を加へると「全國の總人口凡そ六百萬乃至七百萬」であらうと云ふことである。深田氏の推計方法は現在能ふ限りの嚴密さを以て爲されてゐるのであるが、其の基礎とされた戶籍、計帳の記載が、後述の如く充分信賴に値ひせぬ限り、之とて果して幾許眞相に近づいてゐるか疑問であらう。

次に時代は遙かに降つて中世末期戰國時代の全國人口を推計した人に吉田東伍博士(「維新史八講」)及竹越與三郎氏(「日本經濟史」第二卷)がある。吉田氏は德川時代の石高と人口とが大體正比例した關係(一石に付一人)に著目して、天正年間(一二二三三—一二五二年)の石高千八百萬石なれば、當時の總人口は千八百萬人位なるべしと推算され、同じ樣な考へ方で竹越氏も其の少し前の時代の人口を千三百萬人と推計して居られる。此の種の推計方法は極めて大雜把であるが、それだけ却て大要を得て實際に近いものであるかも知れない。

(關山直太郎著「日本人口史」より)